

建物の向きと支配の関係

大平 聡氏
文献資料では、安倍・清原の施設を「柵」という字や「柵」という字で表すことが多い。櫓施設が大きな特徴になっていたのだが、それが軍事施設かというよく分からない。そういう目で見て、最初に委員会に呼ばれた時

びびりしたのが、鳥海区域で発見されている四面櫓の建物。胆沢川のすぐ北側に四面櫓があることを聞き、度肝を抜かれた。以来、ずっとこの建物にこだわっている。近くから発掘された竪穴式建物から、書磁の唾壺や「五保」と書かれた

墨書土器が出ている。四面櫓付建物も同じ時期で、胆沢城の関連施設だろうと考えられている。つまり胆沢川を境界にしてはいい。胆沢城の関連施設として、胆沢城の官人が胆沢川の北岸に出張してこの建物を胆沢城の管轄区域を不す

ラシドマークにしたのではないかと考えた。

原添下区域南東部の2棟の建物について、きよらの箱嶋和久先生の話を知って、私がショックを覚えたのは、北が正面の北向きの建物だということから、古代の「天子南面す」ということから、建物の正面は南だと決まっていたはずだと思っていたが、かなり驚いた。

しかし、確かに南が正面だと、すぐ目の前が沢になる。そうすると鳥海区域の四面櫓付建物も、もしかすると北が正面だった可能性があるのではないかと。それを引きずって、原添下区域は北向きの施設になったのではないかと。「天子南面す」の発想で、櫓は南が正面だということになっており、尋常ではない向きだが、この建物は北に向け

た支配の象徴的建築物だと言えないのではないかと。

戦闘と施設の関係というものは、これからの発掘調査で分かってくるのではないかと。役所支配のための施設、ラシドマークという考えでいくと、きよらの話は新しい観点が与えられたと思う。

ただ、本堂先生は鎮守府の関連施設とおっしゃったが、胆沢城にも多賀城から国司が派遣されていたと考えている。安倍盛好が陸奥守、つまり定員外の守だと考えると、まぎに出張所としての胆沢城の責任者としてふさわしい地位ではなかったか。したがって、胆沢川の北岸、鳥海の地に拠点を選んだのは、陸奥の国司が入ってきたのではないかと、思方を、もう少し追究してみようと思う。

(つづ)

Ⅹ パネル討論要旨



鳥海区域の建物について、胆沢城との関係などから論を展開した大平聡氏

奈良文化財
掘調査部遺

金ケ崎の国指定史跡鳥海柵跡

17

考察 全盛期の中心的建物

2017年度 シンポジウムより

登壇者

コーディネーター

佐川正敏氏 (東北学院大学教授)

パネリスト

千田嘉博氏 (奈良大学教授)

本堂寿一氏 (国史跡鳥海柵跡整備委員会委員長)

大平 聡氏 (宮城学院女子大学教授)

相原康二氏 (えさし郷土文化館長)

高橋 学氏 (秋田県埋蔵文化財センター副所長)

箱崎和久氏 (奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長)